

九年の光輝ある歴史をここに閉じました。

郷里の実家に帰宅しました。弟は既に沖繩で戦死していましたので、父母は私の帰宅を心より喜んでいました。父母と同居して父と共に大工に従事、仕事も生活も順調でした。

昭和二十年十二月十九日結婚。三男一女、孫十人に恵まれています。現在、恩欠連伊予三島支部長として微力ながら尽くしております。

自宅より一五〇メートルの距離にある具定神社（地区の氏神さま）の名誉総代、具定町太鼓台保存会長もつとめてさせていただいております。

具定神社入口の石の鳥居には「大正七年一月 世話人福井好太郎」と刻みこまれています。これは祖父です。神社の社殿は私が昭和二十五年、三十歳のとき責任者として推され宮大工の勉強をしながら建立しました。思い出深い社殿です。

また神社の境内に建つ具定集会所は平成五年九月、私が建設委員長となり落成させたものです。このようにして郷土の文化生活のために、代々の大工請負業を

通じて働かせいただき、お陰で毎日元気に暮らしております。

なお、本調査の参考資料として工兵第十一連隊歴史の外、大平弘氏（元隊員で第四十師団工兵第四十連隊に編入中隊長として勤務、現在は賀勝橋会—中支の武昌に近く、元工兵第四十連隊のあった所—の世話人である）の著書「素石」第二版も利用させていただきました。

戦争が私たちの青春だった

一粒の麦の尊さ

岐阜県 酒井清 幸

—酒井さんは、昭和十八年五月、三島の野戦重砲から満州、本土防衛への軍歴だと聞きました。

部隊の一部はサイパン玉砕、日本近海に敵潜水艇出没のなか、新潟上陸、満州へ残ればシベリア抑留と、自らは選べぬ運命の幸を握られたわ

けです。ねー

私は、大正十一年八月十九日、中津川市の下町で、旧中仙道沿いの「田中屋」という、徳川時代から続いた旅籠（旅館）で生まれました。二人の姉は早く亡くなり、中等学校時代は剣道、野球と、質実剛健の校風の中で教育を受けていました。中等学校卒業の時は支那事変も拡大しつつあった時です。

三菱電機入社翌年、大東亜戦争勃発、昭和十七年徴集兵として兵隊検査を受けましたが、昭和十八年五月召集令状を受け取りました。当時とすれば当然のことと思っていました。父にとっては、一人しかない息子を兵隊にとられるので、内心のショックは、家族の者にも隠せなかったようだったと聞きます。

母は、召集令状を受けてから、ほとんど眠らずに、女の人たちに頼んで千人針の腹巻を作ってくれました。その腹巻は「死線を越える」の意味をもって、穴のあった「五銭貨幣」が縫い入れてありました。また「虎は千里行つて千里の途を帰る」と言われ、虎年の女の人の年の数だけ縫ってもらう習わしでもありました。

私を送り出す母や姉は、悲しみの涙をこらえていたことでしょうが、いよいよ中津の町を出て行くときは、大勢の町内の人に送られて家を出たのですが、祖母や母は、台所の隅で泣きじやくっていたと聞きます。日本のために潔く死んでこいと激励を受け、中津の駅での「万歳々々」の声に送られ出発、静岡県三島の野戦重砲連隊に入隊しましたが富士山が綺麗に見えたのが印象に残っています。

当時の戦況は日本軍にとり、悪化していた時で、アツツ島は玉砕、ニューギニア戦線も連合軍の攻撃が盛んで、各戦線で日本軍は守勢にたつてきていました。そのような状況など細かく我々は知る由もありませんでしたが、三島の兵舎は先に召集された兵隊で満員、私たちは馬屋の寝蓐の中に寝かされました。

入隊一週間ほど後、父母と最後の面会を三島の兵舎ですることができましたのは、我々にとっても幸いでした。私も、これが最後かと手を握り合つたのですが、父母の心境は察するに余りあります。

「征き征きて 生命さやけく死なむ身の

吾を思ほゆ 心ひそかに

歌心も知らぬ二十歳の自分が、切迫した気持ちで残した、辞世ともいうものです。生き還ってみると何か気恥ずかしい思いがしますが、当時、出征すれば当然死と覚悟していた青年の心情でありました。

数日して、いよいよ出発、行く先は知らせられないが、夜明けに練兵場に集合、完全軍装で東海道線三島駅から乗車、窓は全部黒幕が下ろされ、外はまったく見えない。企図を秘匿のため当然のことながら行く先は一切知らされない。下車させられた所は、山陽線下関と分かりました。

下関から関釜連絡船に乗船。釜山より列車で朝鮮半島を北上、平壤、新義州、鮮満国境を越え、満州国東満総省東寧の満州第二九二部隊に転属となりました。馬部隊であるので、来る日も来る日も馬の面倒を見る。我々初年兵の中には家郷を懐かしみ、北斗星を眺めながら、そっと涙を流した者も多かった。

初年兵の心境は経験者でなければ分からない。勤務、演習ばかりか、軍隊の家庭ともいう内務班の生活、私

的制裁は禁止されてはいても、人間性を欠如した、私情にかられピンタを取る古参兵や上級者もいます。教育、鍛錬の名を借りて、暴行する者もいます。特に満州はひどかったと、戦後述懐している者も多いのです。

あるとき、冬の凍てつくような零下三〇度の異国の夜、同年兵がいじめに耐えきれず逃亡、外庭の鉄棒にタオルを巻きつけ、首をつって死んでいた。終戦後もそのご両親には本当のことは言えぬ悲劇もありました。冬期の満州は常に零下二〇〜三〇度の酷寒でありました。ソ連と満州の国境にわずか一人で歩哨に立つとき、あまりの寒さのためか、綏芬河すいふんがの水が「パシツ、パシツ」と裂ける音が聞こえ、深夜の空にすい込まれていくような気がします。その音を思い出す今でも身震いがするほどです。

こんな夜は故国が恋しい思いがつのり、脱走兵が出やすく、もし出るとペナルティーとして東寧の街への外出を禁止されたりしました。これが解除され、久しぶりに外出。白系ロシアの女の子の写真が何枚入った絵葉書セットが目にとまり、買い求める者も多かつ

たものです。「女は平和の女神だ、早く家に帰りたい」と望郷の念にかられるなど、内務班でさきやく一時も苦しい中ででの思い出の一つでもありません。また、北斗七星の彼方に日本があるのだと人知れず涙をこぼしたこともありませう。そのような時、狼の遠吠えが続いていました。

また、こんなこともありませう。あるとき、馬の運動に出掛けましたが陽春の気に包まれて、うとうと馬の背中で居眠りして、馬からころげ落ちてしまいました。何と寝棺の中に横たわっていた死人の上に落ち、びっくりしたことがありませう。満州では上流家庭の人は土の中に死骸を埋め、中流以下では山の方に放っておくのだそうです。一週間くらい過ぎて、親類の人が見に行くと狼などに肉や骨を食べられ何も無くなっていて。これで死んだ人が「天国に上がって行つた」と言つて喜んでいたそうです。風葬や鳥葬はあると聞いたが、狼葬とは満州で初めて知りました。

二年余りの馬との生活。人間より馬の方が大切に取扱われていました。普段、馬の手入れや扱いをする

とき、古兵から言われる言葉に「兵隊は一錢五厘の葉書で集められるが、馬は百円もする。人間より馬が大切だ」とあります。したがつて馬の生死に関する痛痛を起こすと大変でした。ぬるま湯を馬の尻から腹の中間まで通るように、管を二の腕ごと尻の中に突つ込みませう。翌朝、馬の腹のリズムの正しい鼓動を聞いて喜び合つたものです。このような体験は馬扱いした人の、馬を愛し、馬と共に生活した私たちの青春でした。

戦争では必ず生死を分ける運命の岐路があることは、前にお話したとおりです。昭和十九年、南洋群島へ連合軍は進攻しはじめ、日本本土上陸の足掛かりにしようとしていました。我々の部隊の一個大隊は南方へと転属しました。我々の同年兵や先輩たちもその中に入っていました。寒い満州から、日本に近い南洋への転属を喜んだ人もいましたが、幸は不幸となつてしまいました。彼らはサイパンで玉砕しました。そのことは昭和十九年七月十八日大本営から発表されたのです。

残つた私たち部隊も、昭和二十年春、満州から北朝鮮に出て、清津港から日本海へ出航しました。そのこ

ろ、もう日本海にも米軍の潜水艦が出没し、空からも爆撃され、あるいは機雷が投下されていて、沈没する船が多くなりました。しかし、救命具も不足しているので前後に五本ずつの竹筒を組み、胴にくくりつけての航海でした。その間米潜水艦に追われ蛇行しながらでした。

当然、撃沈された味方の船もあります。さまよううちに「陸が見えた、陸が見えた」と叫ぶ、たぶん千島列島だろうと思った。ところが幸いにもそこは新潟港でした。こうして私は救われたのです。生きて帰った故郷日本に戻りえた自分は幸せでありました。そして、その後、茨城県の鹿島灘の浜、千葉の九十九里まで汽車で行き、そこに泊まりながら、対米上陸軍防衛の陣地構築に専念してきました。そして終戦です。

今は飽食時代と言ってもいいが、戦争体験者として次代に残すべきことは、生きることの楽しみ、自由であることの嬉しさ、自分自身を築いていることの幸せ、さらに人との触れ合い……平和そのものを願う気持ちではないでしょうか。

関東軍ノモンハン事件 阿爾山照空隊

岩手県 谷川源 一

軍隊に入ってから履歴は「軍隊手牒」に記入され、それが公的な資料とし、兵隊個人にも渡され、更に同様な軍歴がそれぞれの所轄の連隊区司令部の兵籍簿として保管されています。私は昭和十四年三月四日、現役兵として高射砲第十連隊第三中隊に入営する以前の昭和十四年一月十四日より、主として軍隊に関する記録と、公的な事項や心情などを六冊の手帳に日記として綴っておきました。

私は大正七年一月二十九日、岩手県上閉伊郡遠野町（現遠野市）拾参地割、四拾参番地で生まれました。

昭和十二年徴集の徴兵検査を受け甲種合格でした。当時甲種といえれば心身共に健全と太鼓判を押された男子